

ベトナムの日本語教育における 日本の伝統文化 CLIL 指導の可能性

伊藤由紀子*

近年、ベトナムでは日本語教育が盛んになり日本に在留するベトナム人の数は増加している。しかしベトナムの日本語教育では文化教育よりも語学スキルの習得に重点が置かれている現状がある。言語教育においては自国の文化を伝えていくとともに学びたい外国語の向こう側にある文化を知ることが不可欠である。本研究では、言語とともに文化を体験的に伝える指導法の一つとして CLIL を取り入れ、「絵ろうそく」を題材とした CLIL 実践を検討、実施する。アクティブラーニング型の指導が少ないベトナムにおいて日本語でコミュニケーションをとりながら日本文化を学ぶ CLIL 実践の結果、学習者に、日本語教育に対する意識の変容が見られ、日本文化への興味・関心が高まったことが示唆された。そして CLIL を実践する上で、学習者に合った言語レベルの簡単な表現を使うこと、学習者が興味のあることを体験的に学ばせること、コミュニケーションしながら、アクティブラーニングで学ぶことが大切であるとわかった。

【キーワード】

ベトナムの日本語教育 CLIL 日本の伝統文化・伝統工芸

I. はじめに

2023 年は、日本とベトナムが外交関係を樹立して 50 周年にあたる。この 50 年間で日越関係は政治や経済、文化、スポーツなどあらゆる分野で友好関係を築き発展し続けている（在ベトナム日本国大使館¹⁾。1961 年にハノイ貿易大学（旧貿易幹部短期大学）で高等教育機関における本格的な日本語教育がスタートしたが、学習者数は少なく日本語が話せても仕事のチャンスは限られていた。2000 年代はじめに中等教育機関で日本語が導入されることになり、日本語教育が急速に発展した（Dao, 2018）。さらに 2014 年から日本でベトナム人看護師、介護福祉士候補者の受け入れが始まった。企業でも技能実習生を受け入れるようになり、日本語ができるエンジニアや弁護士に対する採用ニーズが大きくなっている（Dao, 2018）。そのような背景から、近年日本に在留するベトナム人は増加しており、2020 年の在留者数は 448,053 人（出入国在留管理庁）であった。さらに、在日ベトナム人留学生は 62,233 人（日本学生支援機構）で、中国に次いで 2 番目に多い（岡本・Quyen, 2022）。日本語が話せるベトナム人は日系企業で働けるチャンスが増え、日本語教育が盛んになってきたといえる。そのような日本語教育事

情のもと、ベトナム政府は、2014 年に日越大学を設立した（日越大学²⁾。日越大学修了生の進路状況を見ると、ベトナム企業（35%）が最も多く、博士課程進学（16%）、日系企業就職（13%）、教育関係就職（10%）と続いている。学生は高い語学力を身に付けることで希望の就職に繋がっている現状があると思われる。

しかし、「外国語教育」は単に語学力を獲得するだけが目的ではない。最新心理学事典（2013）では、「外国語教育」は「外国語を、第二言語、すなわち共通のコミュニケーション手段として学習し、理解力ばかりでなく発信力を育成することが外国語教育の目標となる」と定義されている。スキルだけでなく、その言語を使ってどのようにコミュニケーションするか模索することが大切だということである。ところが、ベトナムの日本語教育は、教師にアクティブラーニング³⁾ 指導の経験が乏しいこともあり、教科書を使った教師中心の指導、文法や翻訳中心の指導が多いことが指摘されている（Cao, 2017; タン, 2021）。ここでいうアクティブラーニングとは「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法」（文部科学省³⁾ とする。このような背景のもと、能動的な学習者形成を目指し外国語で様々な

*大阪成蹊大学 経営学部

コンテンツを教える指導として CLIL (Content and Language Integrated Learning: 以下 CLIL) に着目した取り組みを行っている事例もある (神村, 2020)。CLIL では、学生の興味・関心に合わせたトピックと語学学習を組み合わせることで学生が能動的に深く学ぶことができる (笹島, 2020)。本稿では、ベトナムにおける CLIL 指導において、筆者が日本で取り組んでいる日本文化・工芸 CLIL と組み合わせ、ベトナムにおける日本の伝統文化・工芸 CLIL の可能性および有効性について検討し提案する。そして、筆者が実際にベトナムを訪れ、日本の伝統工芸である絵ろうそくについて伝えた CLIL 実践についてまとめる。

Ⅱ. 本研究の概要

2.1 研究の目的と手続き

本研究の目的は「ベトナムの大学における日本語での日本の伝統文化・工芸 CLIL 実践の可能性およびその有効性を検討する」ことである。

2.2 研究の手続き

本研究では、まずベトナムでどのような日本語指導が行われているのか、CLIL とアクティブラーニングの指導について、日本とベトナムの文化について整理する。それから、ベトナムで日本の伝統文化・工芸を題材として日本語を教える CLIL をする場合、どのような指導が有効であるのか検討する。そして伝統工芸の一つである「絵ろうそく」を題材として取り上げてベトナムで日本語指導をする CLIL 実践を行う。筆者は 2023 年 3 月に CLIL 教員研修研究所と日越大学合同の国際研究会に CLIL 研究チームとして訪れ、現地の大学生と日越両国の教員に、絵ろうそくについての日本語 CLIL を行った。

本研究におけるリサーチクエスチョン (RQ) として「ベトナムで日本語 CLIL を実践する上でどのようなことが大切なのか」と設定した。学習者の学びと意識の変容については実践後の振り返りの記述を整理し、「日本語学習への意識」「日本文化への興味・関心」の 2 つのカテゴリーに分類して効果を質的に分析する。また、実践者らの事後の研究協議および日本人教員とベトナム人教員からの意見をまとめ、CLIL 指導に関する示唆を得ることとする。

本研究の倫理審査に関して、本実践は CLIL 教員研修研究所の研究の一環として実施されており、日越大学での International Seminar において、研究に関する許可を得ているものである。

Ⅲ. 先行研究

3.1 ベトナムの日本語教育の現状とコミュニケーションティブ・アプローチ

ベトナム語の文字は英語のアルファベットとほぼ同じ文字が使われているが、その語彙の半分以上が、漢語が起源となる漢越語である (今井, 2001; 天野, 2021)。そして日本語の漢語音ともよく似た音や意味の語彙が存在する (松田他, 2008)。ベトナム語と日本語は類似点も多いことがわかる。近年、ベトナムにおける日本語教育は格段に盛んになっている。日本企業のベトナム進出が目覚ましいこともあり、今後も日本語ができることで就業の機会が増えることが予想される (Dao, 2018)。

しかしながら、日本語教育現場での指導においては、深刻な問題が指摘されている。日本語教育の質を考えた場合、教師の絶対数が圧倒的に不足しているのである。実際、日本語を少し話せるといった程度で日本語教師の職に就くことも多い。教師一人に対する学生数も多く、過酷な職である割には収入面で恵まれておらず、教師志望者が少ないという問題もある (池田・酒井, 2020)。さらに、教師が日本語を教える効果的な方法を学べる機会が少なく、指導法について未知、未経験であることも多い (Dao, 2018)。その結果、教師主導による知識伝達型教育が主流となっているのだ。アクティブラーニングが叫ばれている現状に逆行して、学習者は知識を覚える受け身型になってしまっている (神村, 2022)。教師主導型の指導が多いベトナムだが、近年は研修の機会の増加など、少しずつ主体的な学びの重要性が認められてきている (Dao, 2018)。

ベトナムにおける日本語教育については、外国語教授法の一つであるコミュニケーションティブ・アプローチにも触れたい。コミュニケーションティブ・アプローチとは、学習者が実際の場面においてコミュニケーションが行えるようにすることを目指した外国語教授法である (Wilkins, 1976; 閻, 2019)。この教授法は学習する外国語でメッセージを受け取ったり伝えたりできる能力の育成を目指す、学習者中心の教育である。意味と使用場面を結びつけた言語教育が重要で、現実のコミュニケーションに近い形で練習する (小林, 2019)。また、Ellis (2012) は、学生同士のグループワークの効果について報告しており、インタラクティブな活動が大切であると述べている。他にコミュニケーションティブ・アプローチにグループワークを取り入れた例もある (大石, 2020)。本 CLIL 実践では、コミュニケーションティブ・アプローチも踏まえ、実際の場面で日本語を使ってコミュニケーションする場を設

定し、グループで協働しながら課題に取り組ませる。

3.2 CLIL (Content and Language Integrated Learning : 内容言語統合型学習) とアクティブラーニング

ベトナムでも能動的な学習者形成を目指した CLIL が少しずつ実践されている。第二言語と学習内容の両方に焦点が当てられた指導法である CLIL では (Coyle, Hood, & Marsh, 2010:1), 科目力 (Content) ・ 言語力 (Communication) ・ 高次思考力 (Cognition) ・ 国際協働力 (Culture) を意図的かつ有機的に授業設計に組み込んでおり、その中でも特に高次思考力 (Cognition) が重要視されている (渡部・池田・和泉, 2011)。高次思考を必要とする「分析」「評価」「創造」はこれからの社会に欠かせない汎用的な能力としても位置づけられている。CLIL は、語学教育だけでなく総合教育だといえる (池田, 2017)。また、CLIL 授業には以下のような特徴があり、授業設計の際には意識することが大切である。

- ・オーセンティックな素材 (ここでいうオーセンティックとは、教材のために作られた資料ではなく、新聞、雑誌、ウェブサイトなど「本物の」資料を指す) の使用を奨励する。
- ・文字だけでなく音声、数字、視覚 (図版や映像) による情報を与える。
- ・タスク (特に生活に関連するもの) を多く与える。
- ・協同学習 (ペアワークやグループ活動) を重視する。
- ・異文化理解や国際問題の要素を入れる。
- ・内容と言語の両面での足場 (学習の手助け) を用意する。

(和泉・池田・渡部, 2012 より一部抜粋)

CLIL は、このように学習者主体のアクティブラーニング型の指導でもある。ベトナムにおける日本語 CLIL に関しては、一部の大学で実践されている報告がある。神村 (2022) は、ベトナムの大学の日本語専攻学科 2 年生 (初級) を対象に、ベトナムの文化、社会の現状と今後にかかるトピックを扱った CLIL 指導を行った。その授業では、客観的な視点で母国ベトナムを捉え、日本語で表現する過程を通して日本語の運用能力、学習スキル、思考力、発信力の向上を目指した。具体的には「民族」の課題に続けて「少数民族」「少数民族の課題」へと派生させることで、学習者自身が少数民族の課題解決への意見を持つことができるように連動させた授業であった。その結果、以下のような効果が示された。

①自国・ベトナムの社会事情につき俯瞰的な視点で

捉える機会に繋がる。

- ②未習語彙や表現の獲得。
- ③能動的な学習者育成の場として機能する。
- ④「協働の力」の酒養。

ベトナムの日本語教育における CLIL の可能性としては、手探りではあるが有効性が認められたという報告でもあり、アクティブラーニング型の体験的な授業が可能であると思われる。ベトナムでは日本語 CLIL はまだ実践例が多くはないが、少しずつ増えてきているという状況である。

3.3 日本文化とベトナム文化

自国の文化を大切にすることは、我々の生活において非常に重要である。文化庁⁴⁾は、有形、無形の民俗文化財の伝承・活用などへの支援を行っている。有形民俗文化財とは日本人の衣・食・住や農耕、狩猟などの生産・生業や、人の一生や年中行事といった、暮らしの中で使用されてきた用具類や施設など、無形民俗文化財とは、四季折々の祭りや年中行事、風俗慣習や神楽などの民俗芸能、そして生活に関わる民俗技術等である。

同じようにベトナムにも多くの伝統工芸品が存在する。バッチャン焼きという陶器は日本の雑貨店等でもよく取り扱われている。産地バッチャンはハノイ近郊にあり、陶器は村全体の手工業品となっている。他にも刺繍製品や螺鈿製品、竹細工、少数民族の手工業品等も有名である (樋口, 2014)。最近ではベトナムにおいて和食、茶道、アイドルグループといった日本文化が広く浸透してきているという報告がある (ベトナムビジネスサポートデスク)⁵⁾。日本とベトナムは両国とも米を主食にしていることやコーヒーを飲む文化など、食生活にも多くの類似点がある。日本文化とベトナム文化は、様々な点で繋がりが見られ、今後も互いに影響し合っていくと思われる。

母語でも外国語でも、言語教育には必ずその背景に文化が存在する。自国の文化を知って伝えていくことも外国語を学ぶ上でその国の文化を知ること、どちらも大切なことである。はじめに述べた通り、ベトナムの日本語教育においては、文化教育よりも言語スキルに重点が置かれている現状がある。本稿では、文化教育と日本語教育を両立させて、学習者が主体的に学べるような工夫として、日本の伝統文化・工芸を題材とした日本語 CLIL の可能性を模索する。

IV. 日本の伝統文化・工芸 CLIL の検討

4.1 日本の伝統文化・工芸「絵ろうそく」を題材とした CLIL

ベトナムの日本語教育において、日本語の語学としてのスキルだけでなく、文化を題材とした指導はできないか検討した。そこで、伝統工芸として古くから製作されてきた「絵ろうそく」を題材にした CLIL 実践を検討した。絵ろうそくとは、植物のハゼの実から抽出した木蠟を主成分とした和ろうそくに花の絵を描いて、主に仏事に使用するものである。その歴史としては、18 世紀中ごろに庄内地方（鶴岡地域、酒田地域）や会津若松市などで始まったとされており、江戸時代には仏事に使用されるようになった（内藤・昇・車，2004）。伝統的な手法としては、泥絵の具で絵を描いていくが、最近ではアクリル絵の具で描く方法がほとんどである。描かれる花は菊や梅、ボタン等日本の花が多い。雪深い地域では冬に仏壇に供える十分な花が手に入らず、花の代わりに絵ろうそくを供えるようになったといわれている。絵ろうそくは明かりとしてだけでなく、お供えや仏事のおつかいものとしての役割も兼ねている。ベトナムにも、先祖を祀る家庭用仏壇や商売繁盛を願う店舗用仏壇がある。そこには必ず花や線香、ろうそくが供えられており、ベトナム人にとって仏事のろうそくは身近なものである。そのことから、絵ろうそくを題材に取り上げることは適切であると考える。最近では日常生活で石油パラフィンを原料とする安価なろうそくが使用されることが多いが、本研究では教材として日本の伝統工芸品としての絵ろうそくを取り上げる。

なお、「伝統工芸」という場合、経済産業省が「伝統的工芸品」として、経済産業大臣の指定を受けた工芸品 240 品目⁶⁾を指定しているが、ここでは我が国で伝統的に製作されてきた工芸品を含んで示すこととする。

4.2 絵ろうそく CLIL 実践の検討

ここでは、日本の伝統文化・工芸である「絵ろうそく」の学びを通して日本語を教える CLIL 実践について検討する。ことばの向こう側にある文化を教える際には、語学の教科書ではなく本物の教材を使用したい。さらに、先行研究 3.2 CLIL より、高次思考力として挙げられている「評価」「創造」の活動を取り入れたいと考える。実践では日本人一名を含むグループ活動とし、コミュニケーションのための言語は日本語とした。

CLIL 実践の成功のためには、実践後の学習者に

意識の変容が見えることが大切である。実践では、設定した RQ「ベトナムで日本語 CLIL を実践する上でどのようなことが大切なのか」をもとに伝統工芸 CLIL を実践し、学習者の日本語学習への意欲の変容と日本文化への興味・関心の高まりをみたい。そこで本 CLIL により得られる効果について、次のような仮説を立て、実践後の学習者の振り返りより質的に分析してその効果を検証する。

- 1) 学習者は協働して絵ろうそくの課題に取り組み、日本語でコミュニケーションをする機会を得たことで日本語学習への意識に変容が見られるようになる。
- 2) 絵ろうそく体験を通して日本文化への興味・関心が高まるようになる。

以下は、「絵ろうそく」の CLIL 実践計画の概要である。

1. テーマ「絵ろうそく CLIL 作り」
2. 目的
 - 1) 日本の伝統文化・工芸である「絵ろうそく」について知り、製作体験をする。
 - 2) 実際の場面で使用される日本語の表現や描かれる花の名前を知り、場面に応じた日本語を使えるようになる。
3. 実践時間 100 分間
4. 準備物 写真・絵カード 20 枚ずつ、和ろうそく、カラーペン、和紙折り紙
5. 実践の流れ

活動のタイプ	活動内容	活動形態
導入 インプット	和ろうそくと洋ろうそくを比較しながら特徴をつかませる。 和ろうそくの歴史や人々の暮らしとの関わりをティーチャートークで聞かせる。	個人
分類	季節の花の写真カードと、花の名前の漢字カードのマッチング活動をさせる	グループ
創造	描く花に思いを込め、カラーペンで和ろうそくに好きな花を描いていく	グループ
アウトプット① 描写, 説明, 評価	描いた花をグループでコメントし合う	個人→ グループ
アウトプット② 描写, 説明	ろうそくを全体に見せながら、なぜその花を描いたのか発表させる	個人→ 全体

創造	和紙の折り紙で花を折る	グループ
まとめ	全体のまとめ、ふりかえり	全体

導入として、本物の和ろうそくと日常でよく使用される石油パラフィンの洋ろうそくを比較しながら、両方の特徴をつかませる。そして、和ろうそくの歴史や人々の暮らしとの関わりをティーチャートークで聞かせていく。ティーチャートークとは、導入で聞かせる、生徒が理解できる少し発展的なレベルの外国語でのインプットのことである(柏木・伊藤, 2020)。次に、和ろうそくは仏壇に供えられるもので、季節の花が描かれることが多いことを伝える。次に、花の名前をどれくらい知っているか、花の名前の漢字がわかるか、グループで写真カードと漢字カードのマッチング活動に取り組ませる。その後、カラーペンで和ろうそくに好きな花を描く活動をさせる。その際には描く花に思いを込めて、後でろうそくを見せながら発表してもらうことを伝える。絵が描けたらグループで他の人の作品を鑑賞し、互いにコメントし合うことで、それぞれの感じ方の違いや表現力の違いなどを認め合い、評価し合う。その後の全体発表時には、「こんにちは、みなさん。私の描いた花についてお話しします……。ありがとうございました。」といった簡単な発表文のモデルを示す。最後に和紙で折り紙の花を折る。

V. CLIL 実践の実際

5.1 ベトナム CLIL 教育交流セミナー

これまで述べてきたとおり、ベトナムでは、知識偏重型の日本語指導が中心となっていることが問題のひとつになっていることがわかる(Cao, 2017; タン, 2021; 神村, 2022)。そのような中、学習者主体の外国語指導として CLIL が実践されている事例も出てきている。そこで、ベトナムにおける日本の伝統文化・工芸 CLIL の可能性を模索した。その結果、教科書やワークシートを使って教師主導型で教えるのではなく、オーセンティックな(本物の)教材を使って日常生活で使う場面を大切に教えることの重要性を再確認できた。日本語を学ぶベトナムの人々に、ただ日本語の意味が分かればよいのではなく、日本が誇る文化や工芸品の素晴らしさも伝えることで日本語教育が広く深くなる。

筆者はベトナムで日本語を教える教師らと CLIL 教育に関して交流を図り、教育事情を理解し CLIL を通じた連携のあり方を考えるという目的で、

CLIL 教員研修研究所の研究グループ(14名)の一員として2023年3月にハノイを訪問することとなった。行程は以下のとおりである。

1日目(言語は日本語をメインとし、英語、ベトナム語は必要に応じて使用する)

- ・日越大学訪問(日本語 CLIL 授業見学等)
- ・私立 Phenikaa School 訪問・見学

2日目

- ・日越大学訪問(CLILの基本、ベトナムにおける日本語教育、日越大学における日本語教育実践の紹介、香港の CLIL 事情)
- ・日本の伝統文化・工芸 CLIL ①(俳句)

3日目

- ・ハノイ工業大学訪問(CLILの基本・ベトナムにおける CLIL 実践、ハノイ工業大学における日本語教育実践の紹介)
- ・日本の伝統文化・工芸 CLIL ②(日本の伝統工芸「絵ろうそく」作り体験)

4日目

- ・Japanese International School Hanoi 訪問・見学

5.2 絵ろうそく CLIL 実践

訪問日程の3日目に、筆者は「日本の伝統文化・伝統工芸 CLIL ②(絵ろうそくづくり体験)」の実践を担当した。

実践はハノイ工業大学のホールで行われた。参加した学習者はベトナムの大学生22名である。彼らは大学の日本語教育のクラスを受講する低学年である。大学の授業では主にベトナム人の日本語教師の指導を受けている。日本語学習歴については、大学に入ってから本格的に学び始めた学生が中心である。日本語のレベルとして、ベトナム語のアクセントはあるが、日常会話としては問題なく意思を伝達することができる。ライティングに関しては、易しい漢字を交えながら意味の通じる文を書くことはできる。ただ、正確な文法や助詞の使い方、適切に語を選択して正しい文を書くこと等には課題がある。授業では語彙、文法、Listening, Speaking, Reading, Writing といったスキルの習得が中心であり、日本についての文化的な知識を得られる機会は多くない。

また、本 CLIL 実践には日本からの教員およびベトナム在住の日本人の教職員17名、ベトナム人の教員10名も参加した。グループは日本人とベトナム人を混合して、日本語でコミュニケーションする機会を設けた。

実践ではまず、スライドを使って和ろうそくと洋

ろうそくの違いや、原材料、価格などを比較した。そして、絵ろうそくには花が描かれることが多いことを学び、グループで「菖蒲」「蓮」など花の名前の漢字カードと、花の絵の写真マッチングさせる活動を行った。その後、自分の好きな花を選んで和ろうそくにカラーペンで絵を描いて絵ろうそくを製作した(図1, 2)。発表活動として、完成した絵ろうそくを見せながら、順番に描いた花に込めた思いやエピソード等を話した。最後には折り紙でバラの花を折り、グループで集めてフラワーボックスにした。実践は日本語で行ったが、事前に計画していた活動は全てスムーズに実施することができた。



図1 花の写真と漢字のマッチング



図2 和ろうそくに花を描く様子

VI. 分析と考察

本研究では、近年盛んになってきているベトナムでの日本語教育において、CLILを実践できる可能性とその有効性について検討してきた。言語と文化を同時に学ぶ方法として、日本の伝統工芸の一つである「絵ろうそく」を題材に体験型のCLILを実践した。そして、本実践の仮説を検証するため、以下

のように分析を行った。学習者の学びと意識の変容について、振り返りの記述からまとまりのある文をコーディングして質的に類似しているものをまとめ、「日本語学習への意識」「日本文化への興味・関心」の2つのカテゴリーに分類した。有効回答数は22、総字数は1130、学習者一人の平均字数は53.8であった。内容分析の結果は、カテゴリー名、有効数、カテゴリーの内容を表1に示した。内容には言語的なエラーが見られるが、ここでは原文のまま記載する。実践の成果を表1および指導者の見取りから分析していきたい。

表1 実践後の学習者の振り返りの記述による内容分析 (n=22)

カテゴリー	有効数	内容
日本語学習への意識	7	日本語についていろいろ勉強になりました・日本語を学ぶ方法をたくさん知っていて・日本語のじゅぎょうにこのほうほうがやくにたつとおもいます
日本文化への興味	21	日本のろうそくのちしきも分かるようになりました・日本の文化についてもっとしらべたいと思う・日本の伝統的な工芸を体験できてたのしかった・いろいろな日本の伝統工芸にしてみたのしかった・折り紙のたいけんは楽しかったです

表1より「日本語についていろいろ勉強になりました」「日本語を学ぶ方法をたくさん知っていて」「日本語のじゅぎょうにこのほうほうがやくにたつとおもいます」といった日本語学習に対する意識についての記述が7つ見られた。「日本語を学ぶ方法」を知ったという記述もあり、日本語学習に日本文化の学びを取り入れる学習方法に興味を持った学習者がいたことがわかる。これまでの日本語学習の中では日本語のListening, Speaking, Reading, Writingといった4技能の習得が主な学習動機となっていたが、言語の奥にある文化を通して言語を学ぶ方法を知ったということであろう。これまで日本語学習の中で、扱う内容を意識していなかったがもっと日本という国について知りたくなったという意見もあった。新しい学習方法としてCLILに興味を持ったことは、大きな成果であるといえる。

また「日本のろうそくのちしきも分かるようになりました」「日本の文化についてもっとしらべたいと思う」「日本の伝統的な工芸を体験できてたのしかった」という日本文化への興味についての記述は21あり、非常に多かった。一人の振り返りに言語

と内容の両方に関する記述があるものもあり、両方意識していた学習者もいたことがわかった。加えて、何に対してか明示せずに「今日のチャレンジはとても楽しかった」というような回答も見られた。本実践は日本語学習と日本文化の両方の学びをねらいとしていたが、記述の数からみると日本文化の印象が強かったようだ。絵ろうそくの体験が大変印象深かったのであろうと思われる。学習者は作業が丁寧で、スマートフォンで花を検索しながら好きなデザインで描いていた。発表活動では、グループから代表者が出て、自分の夢や思い、家族との思い出など日本語で語った。それぞれの思いが詰まった絵ろうそくのデザインであることがわかり、そのエピソードを全体で共有できたことも印象に残った理由の一つであろう。

仮説では、協働して活動し、日本語でコミュニケーションをする機会を得たことで日本語学習への意識に変容が見られる、としていた。それに関しては「このあとで（日本人の）皆さんと友だちになりたいです」「みんなはしんせつでいいなひとです」「（日本人の）Aさんはとてもかわいいです」と、一緒に活動したグループのメンバーに対する気持ちの記述も見られ、日本語でコミュニケーションできたことがわかった。この分析から、学習者の学びに関しては一定の効果が見られたことがわかる。

次に、ベトナムで日本語 CLIL を実践する上でどのようなことが大切かということに関して、そして CLIL という学習方法について、実践後の研究協議と振り返りで日本人とベトナム人の教員から、表 2 のような意見が得られた。

表 2 から、設定した実践の日本語のレベルが適当であったことがわかる。絵ろうそくの体験に加えて日本語で発表したことやグループで活動したことに対する肯定的な意見が得られた。また、CLIL という学習方法を知らないベトナム人教員にとって、言語と文化を融合させながら日本語指導をしていくひとつのアイデアとなったであろう。本実践では、アクティブラーニング型の指導が少ないベトナムで、日本語でコミュニケーションしながら体験型で日本文化を学ぶ CLIL を提案した。本実践計画においては、高次思考力となる分類や創造活動を取り入れ製作しながら、さらに発表活動を行う中で描写や説明をすることができた。また、仲間の作品を鑑賞する機会を設け、評価しあうこともできた。加えて、教材として日本の伝統文化・工芸である絵ろうそくを扱うことで、同じように、仏壇に花やろうそくを供える習慣のあるベトナム文化との共通点を知ることができた。日本語で進められた CLIL 実践の中で日

表 2 実践後の教員の振り返りのまとめ

カテゴリー	内容
実践について	<ul style="list-style-type: none"> ・日本語 CLIL において、学習者主体のアクティブラーニング型授業が実践できた。 ・マッチング活動は、ちょうど学習者の日本語レベルに合っており、効果的な学習であった。 ・自分が描いたろうそくの思いをこめた発表は、短い表現フレームを使うことでどのレベルの学習者も同じくらいのメッセージ発信ができた。日本語学習が初級であればあるほどシンプルで分かりやすい表現が大切だ。 ・花の意味について発表してもらうステップは、とても良いと思います。 ・絵ろうそく製作は様々な思いを込めた「心の教育」もでき、日本の伝統文化・工芸をベトナムの人々に伝えることができた。 ・日本人とベトナム人を混合したグループにしたことにより、お互いがコミュニケーションを取りながら協力して作業できた。
CLIL について	<ul style="list-style-type: none"> ・伝統工芸の絵ろうそくを扱うことで、深いところまで意識できた授業だと思う。 ・日本語の授業にこのような学習方法は有効だと感じた。 ・今まであまり日本語の言葉以外の経済や文化について勉強したことがなかったです。 ・CLIL のアプローチを使って、日本語指導の初級授業に応用したいと思いました。 ・CLIL の実践授業を行いたいと思っていますが、うまくできるか不安でした。しかし今日の活動のおかげで自信が持てましたのでぜひチャレンジしてみたいと思います。

本文化に触れながら、ベトナム人と日本人の混合グループでコミュニケーションをして、日本語を学ぶことができる実践であったと評価できる。

そして、この CLIL 実践において日本語と絵ろうそくの両方の学びを得られたこともわかった。教員らの日本語指導についての研修機会が少なく、日本語のスキルを教えるだけの、教師主体の授業が多いベトナムで、本実践のように言語と文化の両方に焦点を当てた教育を検討していくことは、今後の日本語教育において大変意義があると考えられる。

また、CLIL を実践する上で、以下の 3 点は必須であるとわかった。これは日本語 CLIL に限らず、どの外国語学習でも大切なポイントであると思われる。

- ①学習者に合った学習言語のレベルでシンプルな表現を使うこと。
- ②学習者が興味を抱くような内容を体験的に学ばせること。
- ③学習言語でコミュニケーションしながら、アクティブラーニング型で学ぶと有効である。

最後に、実践を通して浮かび上がった課題について述べる。ひとつは、ターゲット表現を中心とした易しい日本語を繰り返していたが、実践者が日本語のネイティブ・スピーカーであったことで、難しい表現を多く使用してしまったことである。グループで協力していたので、学習者は難しくても理解してくれていたが、最後まで意識して易しい日本語を繰り返すようにすべきであった。これは、日本における英語授業の場面で、英語のネイティブ・スピーカーが学習者の理解を超えて、どんどん難しくスピードの速い英語で話してしまう問題と似ていると感じた。それから、グループ数が多かったため、マッチングカードを事前に作成するのに、かなりの時間を要してしまったことも反省点である。取り組みやすく、効果的な指導のためには、最小限の準備で、大きな効果が得られることが大切である。今後もより良い指導を目指して改善していく余地があるだろう。

VII. まとめと今後の課題

本研究では、ベトナムの日本語教育における日本の伝統文化・工芸 CLIL 実践の可能性およびその有効性を検討することを目指した。まず、ベトナムでどのような日本語指導が行われているのかや、CLIL とアクティブラーニングの指導について整理し、ベトナムで日本の伝統文化・工芸の「絵ろうそく」を題材として日本語を教える CLIL 実践を行った。

RQ としては「ベトナムで日本語 CLIL を実践する上でどのようなことが大切なのか」と設定した。本研究で検討した「絵ろうそく」の CLIL 実践は、アクティブラーニング型の授業が少ないベトナムで、日本語でコミュニケーションしながら、体験型で日本文化を学ぶことができる指導であった。本実践での、「学習者は協働して絵ろうそくの課題に取り組み、日本語でコミュニケーションをする機会を得たことで日本語学習への意識に変容が見られる」「絵ろうそく体験を通して日本文化への興味・関心が高まる」という仮説に対しては、学習者の振り返り分析より一定の成果が示唆された。本実践計画に

おいては、高次思考力となる場面を取り入れることができた。教材として日本の伝統文化・工芸である絵ろうそくを取り入れたことで、仏壇に花やろうそくを供える類似の習慣のある、ベトナム文化との共通点を知ることができた。そして、日本人とベトナム人の混合グループで、お互いがコミュニケーションを取りながら協力して作業できたことも大きな成果である。

本研究の限界としては、本実践は広いベトナムの中の一大学での実践であったため、これだけで一般化することは難しいということである。しかし、本研究によりベトナムでの日本語教育において学習者主体のアクティブな学びが浸透し、今後の日本語 CLIL への第一歩となったのではないだろうか。学習者がわかる学びの追究のためには、指導者が指導計画や準備を丁寧に行うことが大切である。誰もが実践できる外国語指導を目指し、今後も実践を継続していきたい。

【注】

- 1) 在ベトナム日本国大使館「日越外交関係樹立 50 周年」
https://www.vn.emb-japan.go.jp/itpr_ja/JV50th_ja.html
(2023.11.11 閲覧)
- 2) 日越大学ホームページ
<https://vju.ac.vn/collaboration/enterprises-collaboration/>
(2023.11.11 閲覧)
- 3) アクティブラーニング「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申)(平成 24 年 8 月 28 日)用語集
chrome-extension://efaidnbmninnibpcjpcglcfindmkaj/https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_3.pdf
(2023.11.11 閲覧)
- 4) 文化庁ホームページ
https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/shuppanbutsu/bunkazai_pamphlet/pdf/93438001_01.pdf
(2023.11.11 閲覧)
- 5) 岡山県ベトナムビジネスサポートデスク (I-GLOCAL Pham Thi Hoa)「ベトナムにおける日本文化の浸透」
https://www.pref.okayama.jp/uploaded/life/330052_5175935_misc.pdf (2023.11.11 閲覧)
- 6) 経済産業省ホームページ
https://www.meti.go.jp/policy/mono_inf_o_service/mono/nichiyo-densan/index.html (2023.11.11 閲覧)

【謝辞】

本研究の一部は科研費 20K00877「日本の伝統文化 CLIL における英語の文字指導を重視した教員研修プログラムの構築」の助成を受けて実施しました。外国における CLIL 実践が実現したことは今後の研究に大変有益でありました。神村初美先生、笹島茂先生に厚く御礼申し上げます。

【引用・参考文献】

- Cao, Le Dung Chi. (2017). 「ベトナムの外国語教育政策と日本語教育の展望」『大阪大学大学院 言語文化研究科日本語・日本文化専攻博士論文』
- Coyle, D., Hood, P., & Marsh, D. (2010). *CLIL: Content and Language Integrated Learning*. Cambridge University Press.
- Dalton-Puffer, Christiane (2016) Cognitive discourse functions: Specifying an integrative interdisciplinary construct, *Conceptualising Integration in CLIL and Multilingual Education*, 29-54.
- Dao Thi Nga My. (2018). 「ベトナムにおける日本語教育の事情 -現状と今後の期待-」
https://www.nkg.or.jp/musubu/.assets/msb20180101_2270091_01.pdf
- Ellis, R. (2012). *Language teaching research and language pedagogy*. Chichester, Wiley-Blackwell.
- Wilkins, D.A., (1976). *Notional Syllabuses*, Oxford University Press.
- 天野裕子. (2021). 「ベトナム語母語話者の日本語語彙学習ストラテジーに関する基礎研究」『九州大学大学院 地球社会統合科学府 博士論文』
- 今井昭夫. (2001). 「ベトナムにおける漢字と文字ナショナリズム -漢字・漢文からローマ字表記のベトナム語へ-」『ことばと社会』5, 126-143.
- 池田広子・酒井彩. (2020). 「ベトナムにおけるベトナム人日本語教師の現状と教師研修に関する意識調査」『九州大学留学生センター紀要』28, 1-14.
- 池田真. (2017). 「CLIL におけるトランスエッジング活用のモデル構築」『英文学と英語学』53, 1-12.
- 閻 慧 (2019). 「コミュニケーション・アプローチの特質」, 『比較日本文学研究』12, 1-12.
- 大石敏也. (2020). 「英語初級学習者へのコミュニケーションアプローチ実践」湘北紀要, 41, 127-134.
- 岡本輝彦・Quyen Nguyen Nhu. (2022). 「ベトナムの大学日本学科における日本語教育の現状と課題 -ホンバン国際大学を中心に-」『中国学園紀要』21, 197-204.
- 沖原勝昭. (2015). 「CLIL 導入の目的と実施形態」『京都ノートルダム女子大学研究紀要』45, 59-70.
- 柏木賀津子・伊藤由紀子. (2020). 『小・中学校で取り組むはじめての CLIL 授業づくり』大修館書店.
- 神村初美. (2022). 「ベトナム人初級学習者を対象とした CLIL 実践 -省察的実践の視点から探る足場かけ-」『日本語研究』首都大学東京・東京都立大学 日本語・日本語教育研究会, 1 (42), 33-46.
- 小林ミナ (2019) 『日本語教育 よくわかる教授法 -「コース・デザイン」から「外国語教授法の史的変遷まで」アルク.』
- 笹島茂. (2020). 『教育としての CLIL - CLIL Pedagogy in Japan』三修社.
- タン, テイ, ミビン. (2021). 日本語教育センターシンポジウム 2020 「ベトナムにおける日本語教育事情および日本留学の動向と課題 (正規学部留学生受け入れの新時代に向けて)」『シリーズ新しい日本語教育を考える』10, 11-34.
file:///C:/Users/zuru/Downloads/AA12644323_08_13.pdf
(2023.11.7 閲覧)
- 内藤郁夫・昇愛子・車政弘. (2004). 「伝統的絵蠟燭の調査研究 : その歴史と図案と製造と利用法について」『デザイン学研究』51 (2), 19-28.
- 樋口博美. (2014). 「ベトナムの手工芸をめぐる生活とその支援 -ベトナム手工芸品見聞録から-」『専修大学社会科学研究所月報』606-607, 148-156.
- 藤永保監修. (2013). 『最新心理学辞典』平凡社.
- 松田真希子・タン, テイ, キム, テュエン・ゴ, ミン, トウイ・金村久美・中平勝子・三上喜貴. (2008). 「ベトナム語母語話者にとって漢越語知識は日本語学習にどの程度有利に働くか -日越漢字語の一致度に基づく分析-」『世界の日本語教育 日本語教育論集』18, 21-33.
- 文部科学省. (2018). 『中学校学習指導要領解説総則編 (平成 29 年告示)』
- 渡部良典・池田真・和泉伸一. (2011). 『CLIL (内容言語統合型学習) 上智大学外教育の新たな挑戦 第 1 巻 原理と方法』ぎょうせい.
- 渡部良典・池田真・和泉伸一. (2012). 『CLIL (内容言語統合型学習) 上智大学外教育の新たな挑戦 第 2 巻 実践と応用』ぎょうせい.

Exploring the Incorporation of Japanese Traditional Culture and Crafts through CLIL in Vietnamese Japanese Language Education

ITO Yukiko *

Abstract

In recent years, Japanese language education has become increasingly popular in Vietnam, and the number of Vietnamese nationals residing in Japan has been increasing. However, the current situation in Japanese language education in Vietnam is that the emphasis is on the acquisition of language skills rather than cultural education. In language education, it is essential to convey one's own culture and to understand the culture of the language one wish to learn. In this study, CLIL was adopted as one of the teaching methods to convey culture as well as language in an experiential way. We examine and propose a CLIL practice plan using "picture candles" as a subject. In Vietnam, where active learning type classes are rare, we aimed to teach students to learn Japanese culture while communicating in Japanese. As a result, the following three points were found to be essential. (1) Use simple expressions at a language level appropriate for the learners. (2) Let the learners learn through experience what they are interested in. (3) The importance of communicating and learning through active learning.

Keywords: Japanese language education in Vietnam, CLIL, Japanese traditional culture and crafts, Picture candles

* Osaka Seikei University, Faculty of Management